

## TV番組「介護の人材が逃げていく」を見て

TV番組「介護の人材が逃げていく」を見た。

給与の安さと先々の生活の不安から、高齢者の施設で働く介護に携わる若者たちの1/4が辞めていく現状から、「あなたの老後は大丈夫？」と問いかけ、介護保険制度の落とし穴を指摘する番組であった。

確かに、福祉施設の運営は経済的に大変と思うし、早急に施策としても改善されるべきと思う。

だが、番組を見て何か自分の中でひっかかるものを感じた。

番組で人材確保に動く施設の事務局長が、人材が確保できないと待機の高齢者を「収容できない」と云っていたが、「収容」という言葉は当事者の立場に立つ言葉かなと疑問に思うのは、自分だけだろうか？

また、自分が施設で重症児の療育に携わり出した頃は、療育の専門職はまだ認められておらず、他の施設の仲間は、家政係、看護科に配属された所もあった。

更に、民間に就職した同窓生と給与を比べると安いことを上司にグチると、「障害児の療育に携わることで、他の職業では得られない人としてのあり方、社会のあり方まで気づき取り組もうとしないのであれば、この仕事を続けても意味がない！直ぐに転職しろ！」と指導を受けたこともあった。

我々は協議会を通して専門性認知への組織改訂や先々の身分保障を要望し続け、20年近くかかってようやく厚労省省令改訂に漕ぎ着けた。

法や制度を作り、また、改訂するには、それほど時を要することもある。

スタッフは処遇への不満や先々の不安から「逃げていく」ことは可能だが、そうした不十分な環境条件の中で介護を受ける高齢者や障害児・者は、高齢であることや障害があることから「逃げていく」ことはできない。

当事者のこうした現状から目を逸らさないことが福祉に取り組む原点ではないだろうか。

こうした経験、体験があるだけに、若者たちには、まずは逃げずに当事者のためを思っただけの自分たちの処遇改善を望むなら、後に続く後輩のためにも、みんなで知恵を出し合っただけで制度改善に取り組んで欲しいとも思う。

現場での介護の問題だけでなく、環境条件充実へ問題点を提起し続けるところにも、福祉の営みもあるような気がするのだから……。